

在特会と既成保守

——保守の変容と排外主義運動との連続性をめぐって——

徳島大学 樋口直人

1 目的

この報告の目的は、2000年代後半から日本で台頭している排外主義運動について、既成の保守イデオロギーとの連続性という観点から分析することにある。排外主義運動でもっとも知名度の高い在特会については、安田浩一のルポルタージュが示した見方が人口に膾炙しているが、これは社会学的にみると大きな問題がある。すなわち、安田を含めた論者の多くは、在特会の活動家が社会の縁辺にあって「個人的な鬱憤」ゆえに運動に参加し、「承認欲求」を満たすというストーリーを描いている。これは、排外主義運動が既成の保守とイデオロギー的に強く関係しているという基本的な事実を見逃し、「個人の物語」へと議論を矮小化させることにつながる。それに対してこの報告では、在特会の言説は右派論壇の変化を忠実に反映したものであり、それが街頭にあらわれたに過ぎないという仮説のもとに、両者の関係を分析する。

2 方法

そこで、データとして2種類の素材を用いる。①報告者自身が2011年2月から2012年10月にかけて実施した、排外主義運動の活動家34名に対する聞き取りのトランスクリプト。②1985～2012年における、右派論壇誌（『正論』『諸君!』『Will』）が扱うトピックの年次的変化を示したデータ。これも報告者自身がコーディングした。これを用いて報告者が示したいのは、②にみられる右派論壇の変化が2000年代以降生じており、これが①の言説の骨格を形作っていることである。

3 結果

分析の結果、①については以下のようなことがわかった。排外主義運動の言説は、1990年代に発生した歴史修正主義の延長である。すなわち、歴史修正主義は自国の歴史書き換えにとどまらず、その記述の正統性をめぐって周辺諸国との対立を引き起こした。これが周辺諸国に対する敵意を生み出し、それが「日本に居住する周辺諸国民」（在日コリアン）に対する嫌悪へと転化したのが、「在日特権」というフレームである。②については、冷戦終了後に適当な「敵」を見出しかねていた右派論壇は、2000年代に入って歴史（「慰安婦」問題を含む）、拉致、領土問題などを通して、周辺諸国という敵を確定させていった。言説の水準では、②と①は相当程度一致しており、②の標的を在日外国人に定めて主張を極端にして行動に移したものが、排外主義運動に他ならない。

4 結論

以上から、排外主義運動は2000年代における保守の変容が生み出した“Unwanted Children”（della Porta and Tarrow 1986）だといえる。その意味で、排外主義運動が「保守」を自認するのは誤りとはいえず、排外主義運動のイデオロギーの奇矯さは「保守」の変容との関連で分析する必要がある。

文献

della Porta, D. and S. Tarrow, 1986, “Unwanted Children: Political Violence and Cycles of Protest in Italy, 1966-1973,” *European Journal of Political Research*, 14: 607-632.

樋口直人, 2012, 「排外主義運動のマイクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号.

安田浩一, 2012, 『ネットと愛国』講談社.